

内史毫同

高橋（前原）あやの

器名 内史毫同、内史毫豐同、内史毫觚

時代 西周早期（康王期）

④宋華強「新出内史毫器“𠙴”字用法小議」（簡帛網、11010年五月三日）
http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=1249

出土

1100九年八月、吳鎮烽氏が西安で青銅器を鑑定していた際に發見した。山西より出土したと傳えられる（①吳鎮烽）。

⑤李小燕・井中偉「玉柄形器名“瓚”說——補證内史毫同與《尚書·顧命》“同瑁”問題」（『考古與文物』二〇一二年第三期）
 ⑥涂白奎「内史毫觚與西周王號生稱」（復旦大學出土文獻與古文字研究中心、二〇一二年六月十一日。のち『考古與文物』11011年第三期に再録）
http://www.gwz.fudan.edu.cn/SrcShow.asp?Src_ID=1888

收藏 某收藏家（②吳鎮烽）

著錄

- ①吳鎮烽「内史毫豐同的初步研究」（『考古與文物』11010年第二期）
 ②吳鎮烽編著『商周青銅器銘文暨圖像集成』第一八卷（上海古籍出版社、11011年）9855
 ③王占奎「讀金隨禮——内史毫同」（『考古與文物』11010年第二期）
 考釋
 ④劉傳賓「說“金”字的一種特殊形體」（『古代史與文物研究』11014年第九期（總第一三四期））

器制

通高 29.3 cm、口径 15.8 cm、腹深 20.5 cm、重量 1.19 kg (以上、①呉

鎮烽、②呉鎮烽)、底径 8.9 cm (①呉鎮烽)。通常「觚」と呼ばれる酒器。ラッパ口で長頸、腹部はやや太く、ラッパ型の高い圈足。腹部と圈足には四つの筋状の出っ張りが鋲込まれている。頸部は小鳥紋、その上は蕉葉紋 (あるいは仰葉紋) で飾られ、腹部と圈足は立體的な鳥紋で、互いに相對する。全體は雲雷紋で埋まり、二羽の鳥の尾は下から前や上に向かって旋回する。中間には一つ目紋があつて、トルコ石がはめ込まれている。



器影 (①呉鎮烽より引用)

弗敢處、乍 (作)
襫 (裸) 同。



銘文 (①呉鎮烽より引用)

成王易 (賜) 内史毫豐 (醴)、



銘文 (①呉鎮烽より引用)

成王易 (賜) 内史毫豐 (醴)、

圈足の内壁に四行、十四字の銘文がある。

成王は、周の第二代の王で武王の子。成王について、①呉鎮烽、③王占奎はこれを謚號とし、成王の次の康王の時期に本器が作られたとするが、⑥涂白奎は生號と考える。生號と考る根據として、涂白奎は次のように述べる。

成王易 (賜) 内史毫豐 (醴)、襫 (裸)

成王が内史毫に酒醴を賜つたので、内史毫はこの器を作り、賜つた酒醴を用いて裸祭を行つた。酒醴を長期間置いておくと酸つぱ

くなつて用いることができない。だから生前の成王に酒醴を賜つたのであれば、裸祭も成王が生きているうちに執り行われたはずであり、「成王」も生號のはずである。

また、生號とする他の例に、獻侯鼎（『殷周金文集成』（以下、集成と略稱）2626～2627）の「唯成王大幸才（在）宗周」【唯れ成王、大いに幸るに宗周に在り】がある。

周王の稱號を謚號とする説は先秦から漢代にかけての文献に散見する。例えば、『逸周書』謚法解では周公旦、太公望を葬る際に謚をつけたといい、『禮記』檀弓篇では「死謚、周道也」【死謚は、周の道なり】、『禮記』郊特牲篇では「死而謚、今也。古者生無爵、死無謚」【死して謚するは、今なり。古者生くるに爵無く、死するに謚無し】などとあって、西周には謚があつたことが窺えるが、王國維は「通數跋」（『觀堂集林』卷十八）において王號生稱説を唱え、涂白奎もこの立場からの見解である。

涂白奎の見解に對しては、⑦黃鶴は西周金文の王號を検證し、王號が謚號であると論じる。

涂白奎の見解に對しては、成王が賜つたのは酒ではなく「醴裸」であると反論する。「王賜某某裸」は金文に類似の例がある（裸については後述）。いずれも、王が裸を賜つた後に貝や器を賜つたのであり、黃鶴は、裸は具體的なものではなく祭祀を指すと考える。酒自體を賜つたのでないとすれば、成王の生前に本器を作つたとは必ずしも言えないと。兩説あり、いずれかは判斷しがたい。

内史は官職名。内史の官名が見られる金文としては、この銘文がお

そらく最も早い例である。從來の銘文では榮簋（邢侯簋）（集成4241）の「隹（唯）三月、王令（命）父（榮）眾内史曰、『霽（介）井（邢）侯服』【唯れ三月、王、榮と内史とに命じて曰はく、「邢侯の服を介けよ」と】が最も早かつた。他に内史が王の賜與の對象となつてゐる例はなく、この銘文が唯一の例である。

毫は作器者名。①吳鎮烽は「毫豐」で人名とする。この銘文では豐字か豊（れい）字か判別しがたいが、後引の何尊を參照すると、おそらく豊字。内史の名は毫であろう。

醴は③王占奎、⑥涂白奎は醴酒と解する。醴酒は粗糙の酒。

禮（裸）弗敢處、

禮字は裸字あるいは福字とされることが多い。旁の部分は手で酒器を掲げる形に象り、伝世文献に見える裸の動作を示していると見られ、ここでは假に裸字と解しておく。また手が兩手の字形や、示がない字形もある。動詞としての例（裸にあたる行爲）と名詞としての例（裸禮で使用される特定の酒器の名稱）がある。裸の儀禮については、小南一郎「飲酒禮と裸禮」（『中國の禮制と禮學』、朋友書店、1900年）が詳しい。

吳鎮烽『商周青銅器銘文暨圖像集成』8274の王爵に「王裸（裸）彝」（王の裸彝）とあり、ここでの裸字が青銅禮器の性質を示す「隣（尊）彝」（おそらく宗廟などに安置する器を指す）「旅彝」（おそらく外出時に帶出して使用するための器を指す）の「隣（尊）」「旅」と同様に

器の性質を示している可能性がある。（おそらく裸などの酒禮に使用するための器を指す）

①吳鎮烽は(1)裸祭とい香酒を地に注いで神に祈る一種の祭祀儀式、(2)周王が諸侯や重臣に香酒を酌むことという二つの用例を挙げ、後者を採つて「成王が香酒を酌んで内史毫豐をもてなした」とする。

③王占奎は西周金文で祭祀行爲とする例があることから、裸を王が賜る物、一種の祭祀用具であると解釋する。④宋華強は、醴と裸の關係について、『國語』周語上の「及期、鬱人薦鬯、犧人薦醴、王裸鬯饗醴乃行。百吏、庶民畢從」【期に及びて、鬱人鬯^{ちよう}を薦め、犧人醴を薦め、王鬯^{ちよう}を裸^{さき}醴を饗^みみて乃ち行く。百吏、庶民畢く從^ふ】を引く。

本器の類例に、次の銘文がある。

・何尊（集成 6014）「隹（唯）王初鄆（遷）宅于成周。復每（稱）武王豐（醴）、禪（裸）自天。」【唯れ王、初めて遷りて成周に宅^おる。復た武王の醴を稱^あげ、裸するに天自りす。】

・德方鼎（集成 2661）「隹（唯）三月、王才（在）成周。征（誕）珷（武王）禪（裸）自蒿（郊）、咸。」【唯れ三月、王、成周に在り。誕に武王に裸するに郊自りす、咸^おはる。】

・庚嬴鼎（集成 2748）「王蔑庚嬴曆（歷）、易（賜）曼（裸）、執（贛）貝十朋。」【王、庚嬴の歴を蔑し、裸を賜ひ、貝十朋を贛^{たま}ふ。】

・史獸鼎（集成 2778）「尹賞史獸曼（裸）、易（賜）豕鼎一・爵一。」

【尹、史獸に裸を賞し、豕鼎一・爵一を賜ふ。】

・鮮簋（集成 10166）「王在葢京、啻（禘）于瑩（昭）王。鮮穀（蔑）曆（歷）、卿（裸）。王執（贛）卿（裸）玉三品・貝廿朋。」【王、

葢京に在り、昭王に禘す。鮮蔑歷せられ、裸せらる。王裸玉三品・貝廿朋を贛ふ。】

何尊・德方鼎が動詞としての例であり、庚嬴鼎・史獸鼎が名詞としての例、鮮簋は兩方の例である。何尊の用例が本銘に最も近く、本銘でも動詞として考えることとする。

「虙」字については諸説あり、一定しない。①吳鎮烽は「號」と考え、「饗」の意とする。同簋（集成 4270 ～ 4271）、鮮鐘（集成 143）、奢流簠（集成 4539 ～ 4541）、十三年燠壺（集成 9723 ～ 9724）に同字があるが、人名や地名で用いており、動詞として用いるのは本器のみである。同簋のこの字について、強運開『説文古籀三補』（卷十一）は「虙」と隸定し、郭沫若『兩周金文辞大系圖錄考釋』は「虙」を陝西の洛水のこととする。また吳闡生『吉金文錄』は「侈」に隸定し「洛」の意に解する。『金文編』では「虙」（777）と隸定する。張世超『金文考釋二題』では「號」の古體と考えられた。「饗」の意とする場合、意味は貪欲である。吳鎮烽は、「内史毫豐は成王から香酒を賜つたが、貪欲になつてはならないと思い、ただ少し嘗める程度で、飲むふりをするだけで實際には飲まない」と解釋する。

③王占奎はこの字を「虙」と讀む。陳夢家の『西周銅器斷代』では趣解のこの字を「彖」と讀んでおり、師遽簋蓋の「遽」の字と虎構えの下の部分が一致し、本器のこの字と類似する。虙は且と音通であり、西周金文にはしばしば「不敢且」という例があつて、「余弗敢且」というものもある。陳夢家の『西周銅器斷代』、于豪亮『史牆盤銘文考釋』（『古文字研究』第七輯）はこの「且」を喪・忘の意と解釋しており、

③王占奎は本器の「虜」も同じく忘の意と考えている。

『金文編』777の字と比べると、本器の字は虎構えの形状が少し異なる。③王占奎はこのことに觸れ、この字は舌が突出しており、狗の類の動物と關係すると述べる。狗は夏に常に舌を出して熱を發散しているからである。『說文解字』では「狃」字について、「羆屬。從犬且聲。一曰、狃犬也。」【羆の屬。犬に従い、且の聲。一に曰く、狃は犬なり】と説明し、本器の虜が且と通假であることの證としている。

④宋華強はこの字を「虜」と隸定する。『金文編』の「虜」(777)について、林澣「新版〈金文編〉正文部分釋字商榷」(一九九〇年中)にすでに「虜」と讀むことが指摘されており、嚴志斌『四版〈金文編〉校補』では、この字を「虜」字に帰しているという。④宋華強は「虜」を惰の意としており、⑥涂白奎もこれに従う。虜を惰と讀むのは普通による(虜は心母支部、惰は定母歌部)。本稿でもこれに倣って「虜」とし、惰と讀む。

乍 (作) 櫻 (裸) 同。

「裸同」は、裸祭に用いる同。「同」の下には二つの点がある。①呉鎮烽、③王占奎、⑤李小燕・井中偉、⑥涂白奎らは「同」を本器を指す名詞として、裸祭を行なう際の酒器と捉える。⑦嚴志斌は、「同」の下にある二点に注目し、この点が「金」を示すと考え、「同」を「銅」と解釋する。また、⑧嚴志斌、⑨劉傳賓でも同様の見解が見える。

末尾の二点は、效父段(集成3822～3823)「休王賜效父・三、用

作厥寶尊彝、五八六」【王の效父に・三を賜ふを休とし、用て厥の宝尊彝を作る、五八六】と類似する。嚴志斌は効父の二点が「金」(すなわち青銅)を示すと考える。そこで、同様に本器の「同」と二点が「銅」字、すなわち金(青銅)製の「同」を示すというのである。

ただし、本器の二点を「金」とすべきか、或いは飾筆、重文符號すべきかは定かではないため待考とし、「同」をそのまま「同」と讀んでおく。

本器の器種名に關して、この器は通常「觚」と呼ばれる酒器であるが、「同」という自銘がある。「觚」という呼稱は、宋代以來の呼び方を踏襲したに過ぎず、殷や周の金文にその名稱があるわけではない。また、宋代に「觚」の呼稱を用いる有力な根據はない。本器が「同」を呼稱として用いていたため、一般に「觚」と呼ばれる器は、正しくは「同」であったことができる。

「同」の名稱については、『尚書』顧命篇に「上宗奉同瑁、由阼階墮。……(王)乃受同瑁、王三宿、三祭、三咤。……太保受同、降、盥、以異同秉璋以酢、授宗人同、拜。王答拜。太保降、收。諸侯出廟門俟」【上宗同瑁を奉じ、宗人同拜。王答拜。太保降、收。諸侯出廟門俟】【上宗同瑁を奉じ、阼階由り墮る。……(王)乃ち同瑁を受け、王は三たび宿し、三たび祭し、三たび咤く。……太保同を受け、降り、盥ひ、異なる同を以ひ璋を秉り以て酢し、宗人に同を授け、拜す。王、答拜す。太保、同を受け、祭り、墮め、宅く。宗人に同を授け拜す。王答拜す。太保降り、收む。諸侯、廟門を出でて俟つ】とあり、「同」を器物とする唯一の記述である。この「同瑁」に關して、これまでに爭論がある。一つは、

同と瑁が一つの物を指すという見解、一つは同と瑁がそれぞれ別の物を指すという見解である。

結論としては、本器が作製されたのは周の成王の死後まもなくのことと考えられ、『尚書』顧命篇が成王の死の前後の實録であるかどうかはともかく、先秦の儀禮を描いていると考えれば、時期はそう離れていない。本器の「同」は『尚書』顧命篇に見える「同」を指し、いざれも酒器であると考えるのが妥當であろう。

「同」の字が用いられた經緯について、③王占奎は竹筒が來源であるとする。竹は中が空洞であり、節がある。「同」の口の部分は、その中の節（隔たり）を表しているというのである。本器の形状がまさしく竹のよう、中が空洞で、隔たりがある。それゆえに本器のような器種は「同」と呼稱されたのであろう。

訓讀

成王、内史毫に醴酒を賜ふ、裸するに敢へて虧らず、裸同を作る。

現代語譯

成王が内史毫に醴酒を賜つた。裸を行うのに憚つてはならない。裸祭に用いる同を作る。

（関西大學非常勤講師）